

学 年	教科等	単元名	日 時
第4学年	社会科	地震からくらしを守る（全12時間）	令和7年11月6日（木）

1 本時の目標

学習したこと等を基に、自分の生活と関連付けて「南海トラフ巨大地震」が発生した際の行動の仕方や必要な備えについて考え、表現することができる。

2 本時の指導過程

学習活動及び学習内容（★は評価にかかわるもの）	「自律的に学ぶ」ための手立て
1 本時の学習について確認する。 ○ 本時の学習問題 放課後に「南海トラフ巨大地震」が発生したら、どのように行動すればよいのだろう。 ○ 地震による二次災害 ① 地面のひび割れや液状化 ② 停電 ③ 水道管の破損 ④ 通信途絶 2 二次災害によって生じる問題（困ることや心配なこと）について話し合い、地震発生時の行動の仕方や必要な備えを見つめ直す。（★） ○ 二次災害によって生じる問題（例） ① 消防隊や自衛隊の救助がすぐに来ない。 ② テレビで情報が手に入れない。 ③ 水を使うことができない。 ④ 家族に連絡する手段がない。等 ○ 地震発生時の行動の仕方や必要な備え（例） ① 塾から避難所まで行く道を1つしか知らないから、避難経路をいくつか調べておき、通れる道を使おう。 ② 家に1人であるから、ラジオや電池がある場所を確認しておき、停電したらすぐに点けよう。 ③ 水が飲めなくなると困るから、児童館へ行くときは、水筒を持って行こう。 ④ 習い事のときは電話して迎えに来てもらうから、連絡できない場合のことを家族で話し合っておこう。等 3 想定外の事態が起こった場合の行動の仕方や必要な備えについて話し合う。 ○ 東日本大震災で被災した小学校の事例 ○ 想定外の事態に対応するための行動の仕方や必要な備え（例） ・ 想定より高い津波が来る場合、もっと遠くの避難所へ移動しなければならない。 ・ 附属小より土地の高い場所にある避難所を調べておこう。等 4 本時の学習をふりかえる。 ○ 単元を貫く学習問題の解決度とその理由（例） ・ 80%…想定外のときのことも考えておかなければ、命が守れないと思うから。 ・ 100%…命やくらしを守るために、どのように行動するかや備えを考えることができたから。等	○ 前時の学習について確認することで、自分の生活と関連付けて、地震発生時の具体的な行動の仕方や必要な備えについて考えたいという思いを想起することができるようにする。 ○ 想定される二次災害を4種類提示することで、二次災害によってどのような問題が生じるかについて関心をもつことができるようにする。 ○ 二次災害によって生じる問題（困ることや心配なこと）について話し合う時間を設定することで、過去の地震被害や関係機関の対応等の視点から様々な問題を見いだすことができるようにする。 ○ 「二次災害が発生しても、今考えている行動の仕方や備えで対応できるか。」と問うことで、自分の生活と関連付けて、行動の仕方や必要な備えを見つめ直したり、再構成したりすることができるようにする。 ○ 東日本大震災で被災したある小学校が指定避難所であったことを伝えることで、想定外の事態が起こり得ることに気づき、そのような場合はどうすればよいのかという疑問をもつことができるようにする。 ○ 「想定外の事態には対応できないのだろうか。」と問うことで、行動の仕方や必要な備えについて、避難所の分布や津波の浸水範囲等の視点から考えることができるようにする。 ○ 学習プリントにふりかえりを記述し、仲間と伝え合う時間を設定することで、想定外の事態に対応するための行動の仕方や必要な備えを考えることは、安心へつながるという思いをもつことができるようにする。

学習したこと等を基に、自分の生活と関連付けて「南海トラフ巨大地震」が発生した際の行動の仕方や必要な備えについて考え、記述したり仲間に伝えたりしている。 (思考・判断・表現)【記述分析・発言分析】

11月6日(木)

単元の学習問題

「南海トラフ巨大地震」から命やくらしを守るためには、どうすればよいのだろう。

対応

- ・救助がしやすい。
- ・食料が届かない。

被災した小学校の写真

学習問題

放課後に、「南海トラフ巨大地震」が発生したら、どのように行動すればよいのだろう。

生活

- ・暑・寒が対応できない。
- ・水が飲めない。
- ・トイレがでない。

被災した小学校周辺のハザードマップ(震災前作成)

被災7 津波

ひなん

- ・けがをして動けない。
- ・ひん所へ行けない。

★他のひん所へ
★行けど
をいう

困ること

- ・配電など
- ・情報が入らない。
- ・連絡できない。

ひん所など

情報連絡

- ★ひん所を
決めておく
(家族と)
- ★公衆電話

被災7 津波

通信のひび割れや減衰化

水通管の破損

停電

通信がでない

B児： 自分の家は津波の想定範囲に入っていないくて安心していただけれど、予想外のことが起きるかもしれないから、ちゃんと備えをしようと思った。

- 研究内容1の「社会科の言葉」は、社会的事象について考える際の視点と方法を含むものである。しかし、子どもの姿として見えるものは、視点だけであった。そのため、「社会科の言葉」を「社会科の視点」と変えてもよいのではないか。
- 研究内容1では、話し合う場面として2つの例が挙げられているが、本時は、どちらかに該当するものであったのか、それとも記載のない第3の場面であったのかが判断できなかった。話し合う場面を整理し、明確にできるとよいのではないか。
- 研究内容2の「自らふりかえりを行うための手立て」として、本時では、子どもがふりかえりを交流する場を設定していたが、子どもは漠然と交流しているように見えた。交流する目的を教師も子どもも明確にしておく必要がある。
- 授業前から学習問題を提示していたが、前時からのつながりが不明確で、子どもが学習問題を意識しながら活動していたのか疑問である。本時の学習問題がどの場面で解決したのかを明確にし、子どもと共有する必要があった。

○ 本単元をとおして、授業の終末に、単元を貫く学習問題がどの程度解決できたと思うかを数値化し、理由を記述する時間を設定することで、地震に関するどのような情報を知れば安心につながるのかを自ら考えることができるようにした。数値化と理由の記述をするなかで、自然と1単位時間の授業をふりかえり、今後どうしたいかを考える子どもの姿が見られた。子どものなかで記述したことを仲間と交流する目的が不明確であったため、仲間の考えと比較するという目的をしっかりと子どもと共有する必要があると考える。